

『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』（南川高志）

岩波書店、2003年

中川 久嗣

西暦紀元前55年の夏8月、カエサルは麾下の2個軍団を率い、80隻の船を用いて英仏海峡を渡りブリテン島へ上陸した。翌54年には5個軍団とともに本格的な侵攻作戦を遂行、以後ローマによる植民と文化の移入が進み、属州ブリタニアは「ローマ化」の洗礼を受けて帝国の最北ブロックを形成するようになる。その後突発的な反乱はあったものの、ブリタニアは比較的平和な属州時代を送り、ローマ文明の恩恵を享受する。しかし民族移動期の混乱の中、紀元410年に、波がひくようにブリタニアからローマが撤退する。波打ち際の砂に書いた絵のように、ブリタニアのローマ人は歴史の闇の中に消え去っていった。

本書『海のかなたのローマ帝国』は、わが国の西洋史研究者の手になる、ほとんど初めてと言ってよい古代ローマ時代のブリテン島研究の書である。もともと古代ローマ文明時代のブリテン島についての歴史研究は、わが国ではほとんど手がつけられてこなかった。しかし少し調べてみれば分かるように、この分野の研究は、本家イギリスにおいては、すでにかなり膨大な研究史が存在する。ローマ侵入以前の土着ケルト社会についての研究、ブリタニアにおけるローマの行政諸システムの研究、数多くの考古学的調査とその報告、ブリタニア各地に散在するローマ都市とそれらを結ぶ交通ネットワーク（具体的には道路網）の研究、航空機から見たローマ時代の建築物や道路などの遺構の研究（いわゆる航空考古学）、ハドリアヌスの城壁に象徴されるローマ帝国極北の防衛ラインとそこでの兵士たちの生活ぶりについての研究、いちいち挙げればきりがないうほどの研究がすでに行われている。ヨーロッパでローマ史について関心がある者にとっては、実はきわめてポピュラーなテーマであるにも関わらず、わが国ではそれがほとんど省みられることがなかったというのは、思えば不思議なことである。

本書は序章と第一章において、イギリスにおけるこれまでのローマン・ブリテン研究の歩みと、それが抱え込んできたさまざまな問題点を紹介する。ローマン・ブリテンを最初に学問的態度で取り上げたのは、16世紀後半～17世紀の歴史学者ウィリアム・キャムデンであった。その後、18世紀前半のジョン・ホースリなどをへて、19世紀のヴィクトリア朝時代には考古学的成果がそこに加わる。さらにイギリス植民地主義の影響を受けたりもするが（フランシス・ジョン・ハヴァフィールド）、それに対するコリングウッドなどの批判的考察もあり、戦後は新たな考古学的成果や、航空考古学やプロセス考古学、さらにポストプロセス考古学などの新しい方法による成果も加わり、日々進展している様子が解説されている。

第二章は、まずローマ侵攻以前のブリテン島の住民たち、すなわちケルト人たちについての、研究史の問題整理が行われる。その場合、「ケルト」という言葉の持つイメージと、それがこれまで担われてきたさまざまな意味合い（しばしば多分に政治的なそれ）について注意が喚

起される。そしてカエサルのブリテン島侵攻（紀元前55年）からクラウディウス帝の属州設置（紀元43年）までのプロセスが説明される。通常、ローマの侵入以前のブリテン島のケルト人を我々は「島のケルト」などと呼んでおり、大陸からガリアのケルト人が移住したというイメージを持っているのであるが、今日のイギリスの学界では、大陸からの民族移住は、少なくともブリテン島の文化発展の契機となるようなものは、存在しなかったとする見解が支配的であるという。そして「島のケルト」という集団そのものが、実際には存在せず、18世紀に発明されたフィクションであったとする学者もいるという。それどころか、ブリテン島の歴史を考えると、この「ケルト」的な要素を考慮に入れることは「有害」であるという意見すらあるらしい。古代イギリスをめぐる考古学的・歴史学的議論は、本場イギリスでは、ずいぶんと進んでいるということが改めて知らされる。

第三章は、ローマによる属州ブリタニアの統治と、女王ボウディッカの反乱が扱われる。女王ボウディッカの反乱は、帝政期の歴史家タキトゥスの著作『アグリコラ』によって知られる事件である。紀元60年に、ブリタニアの属州総督スエトニウス・パウリヌスの時代、ローマの圧政に耐えかねたイケニ族を中心とした蜂起が勃発した。女王ボウディッカ率いる反乱軍は、ローマによるブリテン島支配の最初の拠点カムロドゥヌム（現コルチェスター）を焼き払い、ペティリウス・ケリアリス率いる第9軍団を壊滅させ、ロンディニウム（現ロンドン）を劫略した。その北方にあるウエルラミウム（現セント・オールバンズ）ではローマ市民とその同盟者7万人が殺戮されている。しかし最後はローマ軍を集結させた総督スエトニウスによる反撃により、8万人もの犠牲者を出して集結した。この反乱は、ローマのブリテン島支配を揺るがすほどの大事件であった。しかしまた同時に、この事件は支配者ローマ対被支配者ブリテン島民という単純な図式では捉えきれない出来事であるという。後世になってさまざまな見解が、この反乱の性格づけに際して提出されるが、どれも矛盾点があったり、無理があったりで、正確な解釈が確定していない。ローマを単純に原住民の抑圧者として示すような、原住民側の史料も乏しい。またタキトゥス自身の叙述の中にもさまざまな矛盾点が存在する。そうした問題の整理が、いわゆる「ローマ化」の概念の再検討とともに、筆者によって丁寧に進められている。

第4章は、第3章から引き続き、属州ブリタニアの「ローマ化」について考察されている。この章では「ローマ化」の問題を、特に都市と都市化という点にウエイトを置いて考察している。そこでは都市の構造や制度についての検討のほか、都市化におけるローマ軍の役割なども考察される。そしてカムロドゥヌム、グレウム、リンドウム、ウエルラミウム、ウエンタ・シルルム、カッレウア、ウエンタ・ベルガルム、ウィロコニウム・コロノウイオルムといった具体的なローマ都市が取り上げられている。特にロンディニウム（現ロンドン）が詳しく考察される。都市だけではなく、村落やウィラもについても都市化との関連から説明されている。またブリテン島住民のローマへの帰属意識や、彼らの信仰の世界について、読者はくわしく知ることが出来る。

第五章では、属州ブリタニアの北の端、つまりローマ帝国の北方の辺境警備にあっていた兵士たちの暮らしぶりについて扱われる。具体的には有名なハドリアヌスの長城（紀元2世紀

前半に建設)のウインドランダ(要塞)遺跡で1973年に発見された木版文書(総数2000点以上にのぼる)を巡って、辺境ローマ軍兵士の軍務や日常生活の復元が行われる。この木版文書からは、守備隊の規模、兵士たちの健康状態がわかるほか、そこには休暇願い、物資補給報告、人事推薦文書、公的ならびに私的な書簡などが含まれていて、実に興味深い。そこには帝国ローマの拡大・防衛といった大きな世界観は希薄で、寒く暗い辺境の地で淡々と日常の軍務をこなし、しばしば現地住民たちと親密な関係を持って生きてゆく一般の兵士たちの姿が読みとれるのである。筆者は終章において次のように述べている。「遙かなたのブリテン島は、充分にはローマ帝国になりえなかった。ブリテン島が完全にローマ帝国になったのは、近代以降に形成された歴史像においてである。しかし、そうして形づくられた『海のかなたのローマ帝国』は、実態とは相容れぬ、『幻想』の帝国であったのである。」(219-220頁)

さて、イギリスの古代史については、本書によってその発展の糸口が作られたわけであるが、それ以外のヨーロッパの国々の古代史つまりローマ文明史についても、わが国ではこれまであまり光を当てられてこなかった(もちろんローマ本国であるイタリアは別だが)。例えばフランスやスペイン、ドイツやオランダ・ベルギー、そして中欧諸国などだ。例えばフランス、つまりガリアのローマ文明期(ガロ・ローマン)の研究なども、一部に少しばかりの概説があるのみで、それを専門としてまとめたような成果は少ない。翻訳書なども乏しいと言わざるをえない。しかしこれとても、本家フランスではこれまでの膨大な研究史のアルシーヴが存在する。今後は、古代ローマ文明の、ヨーロッパ各地での、いわばローカルな歴史研究が増えてくることを願ってやまないものである。

最後に、今日比較的入手しやすいローマ文明期のブリタニアに関する文献をいくつか挙げておこう。より専門的で詳細な研究文献については、本書『海のかなたのローマ帝国』を参照されたい。

Malcolm Todd (ed) , A Companion to Roman Britain, Blackwell, 2004.

Barri Jones & David Mattingly, An atlas of Roman Britain, Oxbow Books, 1990.

R. G.Collingwood, & Ian, Richmond, The Archaeology of Roman Britain. Methuen & CO LTD, 1969.

S. Ireland (ed.) , Roman Britain: A Sourcebook. Routledge, UK, 1995.

M. Millett, The Romanization of Britain. Cambridge UP, 1990.

T. W. Potter, Roman Britain. British Museum Press, 1983.

M.E. Jones, The End of Roman Britain. Cornell UP, USA, 1996.

Peter Salway, The Oxford illustrated History of Roman Britain. Oxford UP, 1993.

John Wachter, Roman Britain. J. M. Dent & Sons Ltd, 1978.

David BRAUND, Ruling Roman Britain: Kings, Queens, Governors and Emperors from Julius Caesar to Agricola. Routledge, UK, 1996.

Roger J.A.Wilson, A guide to the Roman Remains in Britain, Constable, 2002.

T. Darvill, Prehistoric Britain from the Air: A Study of Space, Time and Society. Cambridge UP,

中川 久嗣

1996.

S. S. Frere & J.K.S. St Joseph , Roman Britain from the air. Cambridge University Press, 1983.

D. E. Johnston, (eds) , Discovering Roman Britain. Shire, 1983.

John Wachter, The towns of Roman Britain, Routledge, 1974.

A.L.F. Rivet, Town and country in Roman Britain, Harper Collins, 1964.

A.L.F. Rivet (ed.) , The villa in Roman Britain, Routledge & K. Paul, 1969.

Hugh Davies, Roads in Roman Britain, Tempus, 2002.

Richard W. Bagshawe, Roman Roads, Shire, 2000.

Ivan D. Margary, Roman roads in Britain. John Baker, London, 1973.

David J. Breeze, Roman Forts in Britain, Shire, 2002.